

松本市宮の下遺跡

—県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書—

1988・3

松本市教育委員会

松本市宮の下遺跡

—県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書—

1988・3

松本市教育委員会

序

宮の下遺跡は松本市の東南部、内田地区にあり、この周辺の東山山麓は、古くは縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残され、隣接する塩尻市片丘地区とともに、早くから識者の注目するところとなっていた場所でもあります。

しかしながら、近年この地区に進められている県営ほ場整備事業が、当遺跡一帯に及んだため、松本市教育委員会では、長野県松本地方事務所の依頼を受け事業予定地内の遺跡の発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は市教委職員を中心に地元考古学研究者の先生方等で組織した調査団により10月1日から10月21日にわたって実施されました。

今回の発掘は、記録保存とよばれ、開発のために遺跡を破壊するがその前に記録をとっておくという性格のもので、本書を残して遺跡は消え去る運命にあります。せめて、本書に記された調査結果が充分に活用され、郷土や先祖の歴史を探る一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました両内田土地改良区、炎天下、発掘に従事された地元の皆様に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和63年3月

松本市教育委員会

教育長 中 島 俊 彦

例　　言

1. 本書は昭和62年10月1日から10月21日にかけて行われた宮の下遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は両内田地区の県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受けて、松本市教育委員会が調査を実施したものである。
3. 本書の執筆は、I事務局、II、III 2(1)竹原 学、その他については熊谷康治が行なった。
4. 本書の編集・作成は熊谷康治を中心に池沢智恵子の助力を得て事務局が行なった。
5. 本書の作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。

遺物の実測 岩野公子、熊谷康治

遺構図類の整理・トレース 土橋久子、熊谷康治

遺物トレース 岩野公子

遺構写真 熊谷康治

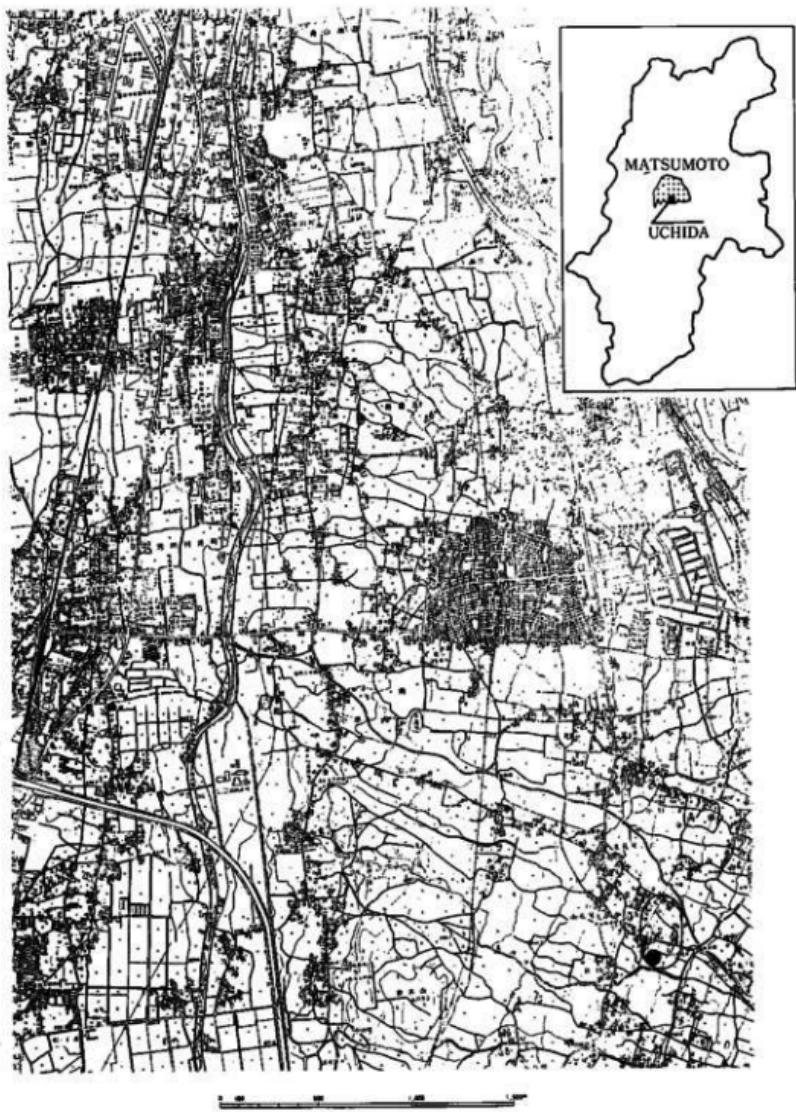
6. 本調査に関する書類、出土遺物、写真、図類は松本市立考古博物館が保管している。

目 次

I 調査の経過	3
1 事業の経緯	3
2 調査体制	3
3 作業日誌	5
II 遺跡の環境	7
1 遺跡の立地	7
2 周辺遺跡	7
III 調査の結果	9
1 調査の概要	9
2 遺構	9
3 遺物	15
4 ロームマウンド	19
IV 結び	19

挿図目次

・第1図 宮の下遺跡分布・調査位置図	2
・第2図 宮の下遺跡調査範囲図	4
・第3図 周辺遺跡	6
・第4図 調査地区全体図	8
・第5図 竪穴状遺構・土壙(1)	10
・第6図 土壙(2)	11
・第7図 土壙(3)	12
・第8図 出土遺物	15
・第9図 ロームマウンド(1)	16
・第10図 ロームマウンド(2)	17
・第11図 ロームマウンド(3)	18



第1図 宮の下遺跡分布・調査位置図

I 調査の経過

1. 事業の経緯

- 昭和61年 8月29日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 昭和62年 6月23日 蔡沢池遺跡の試掘調査を実施。
- 7月3日 同遺跡の保護協議を両内田土地改良区にて実施。遺跡名を宮の下遺跡に変更。
- 7月24日 本年度調査地区についての打ち合せ会議を合同庁舎にて実施。出席者は松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 7月31日 国庫補助金、計画変更承認申請書の提出。
- 8月5日 昭和62年度県営は場整備事業両内田地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。
- 9月30日 宮の下遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 10月29日 宮の下遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 11月25日 宮の下遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 12月9日 国庫補助金、計画変更承認通知。
- 12月24日 県補助金、計画変更承認申請書の提出。
- 昭和63年 1月11日 県補助金、計画変更承認通知。

2. 調査体制

- 調査団長 中島俊彦（松本市教育委員会教育長）
- 調査担当者 神沢昌二郎（松本市立考古博物館館長）
- 現場責任者 熊谷康治（社会教育課主事）
- 調査員 土橋久子（長野県考古学会員）
- 事務局 浅輪幸市（社会教育課長） 小松晃（文化係長） 柳沢忠博（主査） 大村敏博（主査） 熊谷康治（主事） 直井雅尚（主事） 洞田睦子
- 作業協力者 赤羽包子、飯沼富夫、五十嵐祐之、岩野公子、臼井美枝子、奥原富藏、唐澤友子、葛原武善、瀬川長広、田中泉造、土橋久美子、鶴川登、中島新嗣、中島督郎、中村恵子、中村文一、中村商穎、林源吾、丸山よし子、丸山麻子、丸山久司、丸山誠、横山篤美、横山信七、横山小夜子、横山保子、若井七十郎



第2図 宮の下遺跡調査範囲図

3. 作業日誌

昭和62年10月1日	(木) 曇時々雨	作業開始。重機による抜根作業。	
10月2日	(金) 晴	資材の搬入、テントの設営。重機による堆土作業。	
10月3日	(土) 晴	重機による堆土作業継続。検出作業開始。	作業員：9名
10月5日	(月) 晴	重機による堆土作業午前中で終了。検出作業継続。北側上段よりロームマウンド、土壤、ピットの再検出。	作業員：13名
10月6日	(火) 雨	雨の為発掘作業中止。	
10月7日	(水) 晴	検出作業継続。	作業員：13名
10月9日	(金) 曇のち晴	ポイント設定。ロームマウンド1～4, 6, 7、堅穴状遺構1, 2半剖。	作業員：11名
10月12日	(月) 曇	ロームマウンド1, 3, 6半剖継続。ロームマウンド2, 4, 7、堅穴状遺構土層図作成。ロームマウンド11, 12写真撮影。ロームマウンド2, 4, 6, 7土層写真撮影。	作業員：12名
10月13日	(火) 晴	土壤1半剖、土層図作成。ロームマウンド1, 3, 6土層図作成。堅穴状遺構、ロームマウンド掘り下げ。	作業員：12名
10月15日	(木) 曇	土壤1、ロームマウンド掘り下げ継続。堅穴状遺構掘り上げ写真撮影。	作業員：9名
10月16日	(金) 曇一時雨	土器洗い	作業員：1名
10月17日	(土) 曇	土器洗い	作業員：1名
10月18日	(日) 晴	整理作業	作業員：1名
10月19日	(月) 曇のち晴	土壤、ロームマウンド掘り上げ写真撮影。全体図平板測量。	作業員：19名
10月20日	(火) 晴のち曇	整理作業	作業員：1名
10月21日	(水) 晴	地形測量。現場撤去、資材運搬。	作業員：10名



作業風景



- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 1. 長泉寺道路 | 6. 清心道路 | 11. 大久保道路 |
| 2. エリ穴道路 | 7. 砂原道路 | 12. 梅原道路 |
| 3. 一ツ家道路 | 8. 赤木山道路群 | 13. 五斗林道路 |
| 4. 八幡平道路 | 9. 小池道路 | 14. 三郎城道路 |
| 5. 船越空道路 | 10. 橋下道路 | |

第3図 周辺道路

II 遺跡の環境

1 遺跡の立地

宮の下遺跡は松本市の東南、内田地区に所在、標高730~740mを数える斜面に位置している。地形的には鉢伏山地西麓に広がる複合小扇状地面上にあり、遺跡の北を北西方向に流れる塩沢川や舟沢川の埋積・浸食作用を受けている。堆積層はこれらの河川による堆積の所々に、ローム層が残丘状に残存している。

今回の調査地点は県道片丘・塩尻線の東方200mの崖の湯線南側にあり、塩尻市境に接している。遺跡はこれより北方に伸びると考えられ、従って調査地は遺跡南端ということになる。

2 周辺遺跡

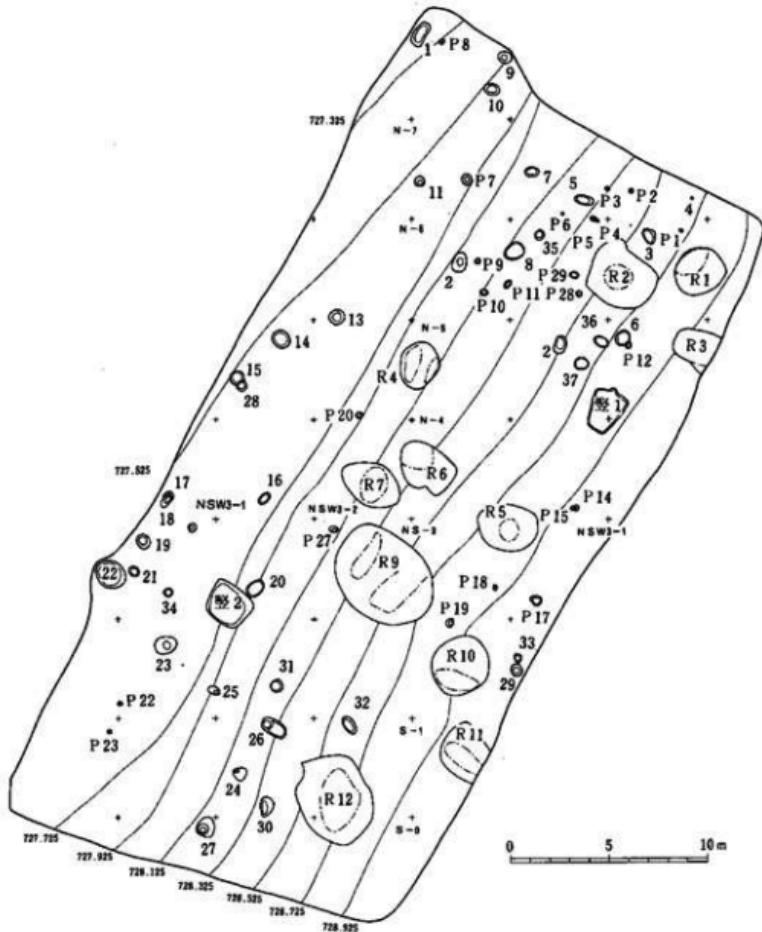
本遺跡周辺、松本市東南部は前述のような地形面にあるため、縄文時代を中心とした遺跡が展開している。この内調査が行われた遺跡も多く、この地の縄文遺跡の様相が具体的になりつつある。

縄文時代の遺跡は帆瀬堂・五斗林で早期押型文土器が出土している。続く前期は昨年調査を行った清心遺跡で諸磯式期の住居址・土壙・集石が検出され、また五斗林遺跡でも前期土器が出土している。中期になると遺跡は急増し、雨堀・ツツ家・長泉寺で遺物が出土している。特に雨堀遺跡は本遺跡北方にあり、昭和55~56年の調査で中期初頭~末の住居址19軒・土壙・集石・土器一括廃棄遺構が検出され、中期の大集落であることが確認された。後・晚期の遺跡は少ないが、エリ穴遺跡では晚期前半の土器・耳飾りが多量に出土している。奈良・平安時代の遺跡はその実態が不明だが、清心遺跡では中世の溝・火葬墓・土壙が検出されている。

次に内田地区の西下方、寿地区赤木山周辺には多くの遺跡が集中している。現在までに調査が行われ内容の判明している遺跡としては、前田木下遺跡・白神場遺跡・北原遺跡・石行遺跡が挙げられる。時代毎に見ると、北原遺跡では縄文早期末の集石と多量の土器片・特殊磨石をはじめとした石器が出土し、白神場遺跡からは前期末の住居址・土壙群より十三菩提式に比定される遺物の出土をみている。中期の住居址・遺物は前田木下遺跡で検出され、石行では晚期末の土器・石器類がおびただしい量出土している。弥生時代になると白神場遺跡で方形周溝墓が2基検出され、他に横山城遺跡で中期前半の土器が出土している。古墳時代の遺跡は石行遺跡の前期住居址群・白神場遺跡の前・中期住居址などが代表例であろう。奈良・平安時代及びそれ以降の遺跡は縄文時代の遺跡に匹敵して多く、調査が及んだ遺跡として石行・前田木下・赤木山・赤木南城が挙げられる。

参考文献

- 1 松本市・塩尻市・東筑摩郡郷土資料刊行会 「松本市・塩尻市・東筑摩郡誌 第二巻 歴史上」 1973
- 2 松本市教育委員会既刊報告書
『内田町塩道路』 1981 「赤木山遺跡群Ⅰ」 1985
『内田西堀道路 第2次』 1982 「赤木山遺跡群Ⅱ」 1987
『前田木下道路』 1984 「内田清心・砂原遺跡」 1987



第4図 調査地区全体図

III 調査の結果

1. 調査の概要

本遺跡は松本市内田字宮の下に所在する。同地区は鉢伏山を主体とする東山山麓に位置し、周辺は縄文時代中期の大きな遺跡である雨堀遺跡をはじめとして埋蔵文化財の多い地区として知られているところである。宮の下遺跡もその一つとして知られていた。今回両内田地区のは場整備にかかるところとなり、調査に先立って試掘を実施したところ、縄文中期の土器片が出土した。このため縄文の集落址を予想したが、結果は次のとおりであった。

調査地区は現況桑畠で東側から西側へ傾斜しており、途中に段があり西側が低い。調査面積は約850m²である。検出面までは段下が約20cm、段上が約40~70cmと深い。基本土層はI層は黒色土で上層は耕作土、下層は黒褐色土で共に小礫が混入する。厚さは15~60cmである。II層は茶褐色土で小礫が混入し、厚さは5~10cmであって、遺構によってはこの面で検出できる。III層の上面が検出面である。礫混りの二次堆積ロームで黄褐色土である。検出面より約10~20cm下は黄色土の砂利層となる。検出面までは西側の段下が浅く、東側の段上は深い。検出された遺構は竪穴状遺構2基、土壙37基、ピット24基だけで他は、ロームマウンドが11基確認された。遺物は陶器、内耳土器片、土師質土器、古錢、キセルのみで、量も少量である。

2. 遺構

今回確認された遺構は前述のとおりである。種類別に要旨を述べたい。

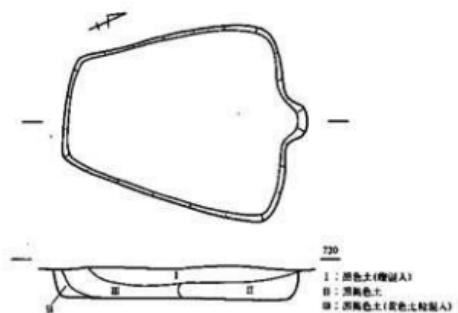
竪穴状遺構

竪穴状遺構は基本的には方形又は長方形を呈し、性格は土壙と似ており、住居址のような施設を有しないものを本遺構とした。今回は竪1、竪2の2基である。竪1は北側に小さな張出しのある不整形な長方形を呈し、規模は232×163cm、深さ34cmを測る。南北に長軸をとる。遺物は内耳土器片(1)のみであった。竪2は長方形を呈し、規模は215×191cm、深さ52cmを測る。東西に長軸をとる。遺物は陶器片、土師質土器片が少量で図示しない。他にキセル(6)の吸口部分が底部より出土した。

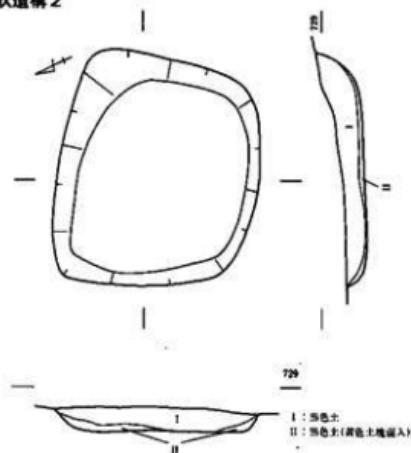
土 壙、ピット

土壙は形状は円または橢円形、長方形で、大きさはおよそ50cm以上を測るもの。またはそれ以下でも内部に人為的と思われる石を持つものとした。今回は37基が確認された。石を持つものは土壙1、13、18、19、21、22の6基である。このうち10~20cm大の小礫が集石状をなすものは土壙14、22である。土壙22は炭化物を含む。土壙19は30cm大の平石が重なるように入っている。遺物は土壙2から寛永通寶、土壙18から近世磁器、土壙21から開元通寶、土壙23から中近世陶器の蟹盤(2)、土壙24から中近世陶器、土壙27から内耳土器が出土している。ピットは24基確認された。円形または橢円形を呈し、大きさは10~40cm前後である。遺物を出土したものはない。

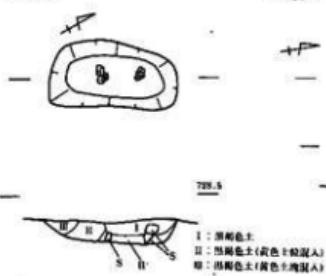
豊穴状造構1



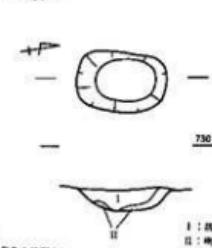
豊穴状造構2



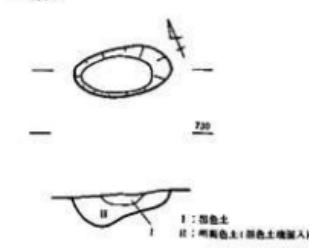
土壤1



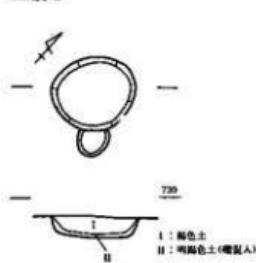
土壤2



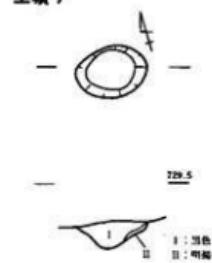
土壤5



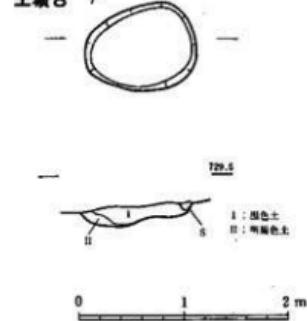
土壤6



土壤7

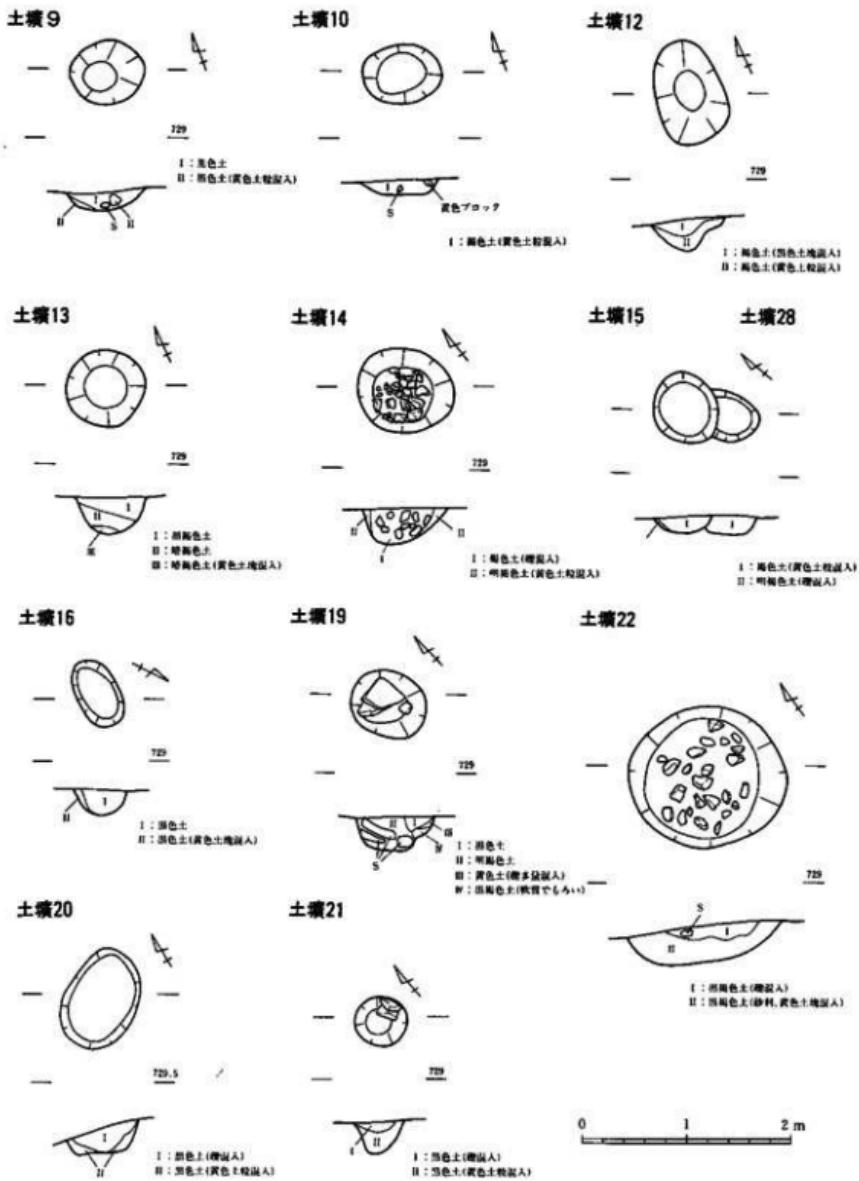


土壤8

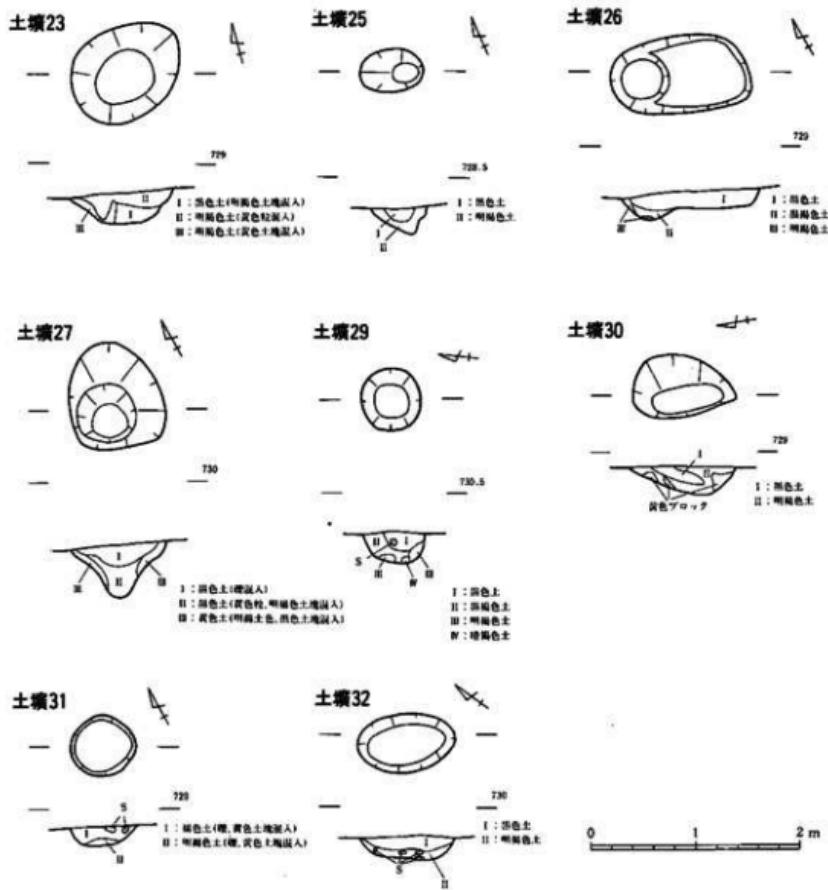


0 1 2 m

第5図 豊穴状造構・土壤 (I)



第6図 土壤 (2)



第7図 土壌 (3)

土 壤 一 覧 表

番 号	平 面 形	規 模 (cm)		出 土 遺 物	摘 要
		長 軸 × 短 軸	深 底		
1	長方形	72×63	25		20cm大の亜角礫
2	橢円形	86×56	24	寛永通寶(4)	
3	橢円形	81×61	22		
4	円 形	径 23	41		
5	橢円形	93×46	29		
6	橢円形	80×70	10		
7	橢円形	70×49	28		
8	橢円形	108×82	20		
9	円 形	径 61	19		
10	橢円形	76×56	20		
11	円 形	径 49	22		
12	橢円形	99×65	36		
13	円 形	径 77	34		
14	橢円形	92×79	23		10~20cm大亜円礫、集石状
15	橢円形	68×61	25		
16	橢円形	68×40	30		
17	()	()	()		
18	()	()	()	磁器	20~30cm大亜角礫
19	橢円形	72×64	33		30cm大の平石
20	橢円形	97×69	30		
21	円 形	径 47	30	寛元通寶(5)	20cm大の亜角礫
22	橢円形	153×134	()		10~20cm大の亜円礫、集石状、炭化物含む
23	橢円形	114×86	42	陶器(蟹盤)(2)	
24	橢円形	70×59	18	陶器	
25	橢円形	59×41	34		
26	橢円形	132×73	16		
27	橢円形	100×91	50	内耳土器	
28	(橢円形)	41×46	22		
29	円 形	径 57	39		
30	橢円形	99×59	27		
31	円 形	径 59	21		
32	橢円形	94×54	23		
33	橢円形	42×37	29		
34	円 形	径 44	()		
35	円 形	径 36	17		
36	橢円形	77×50	15		
37	円 形	径 62	17		

豊穴状造構一覧表

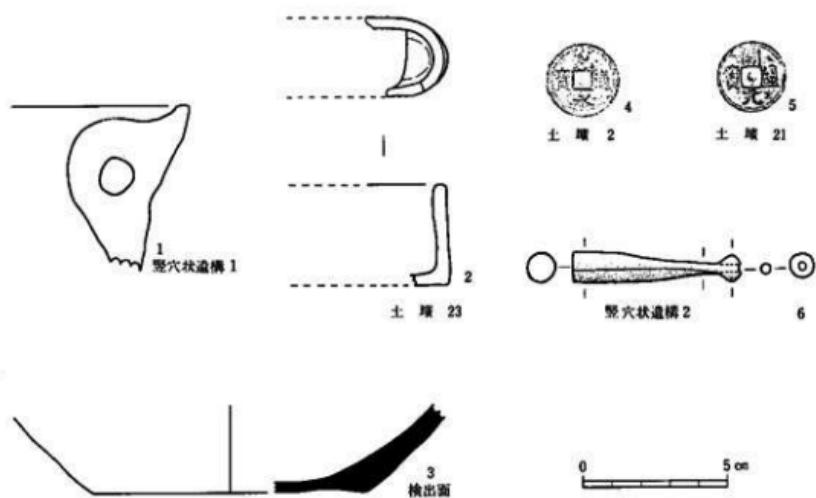
番号	平面形	規 模 (cm)		出土遺物	摘要
		長軸	短軸		
1	不整長方形	232	163	34 内耳土器(1)	北壁中央に張出し有り
2	不整長方形	215	191	52 陶器、土師質土器、キセル(5)	

ピット一覧表

番号	平面形	規 模 (cm)		番号	平面形	規 模 (cm)	
		長軸	短軸			長軸	短軸
1	円形	径	17	21	16 欠番		
2	円形	径	22	19	17 不整円形	56×51	20
3	円形	径	21	16	18 円形	径 23	9
4	円形	径	13	19	19 楕円形	44×34	32
5	楕円形	41	27	18	20 楕円形	34×36	33
6	楕円形	13	10	25	21 欠番		
7	楕円形	58	45	17	22 円形	径 20	17
8	円形	径	23	22	23 円形	径 22	13
9	円形	径	27	15	24 欠番		
10	楕円形	41	26	47	25 欠番		
11	楕円形	45	29	16	26 円形	径 37	27
12	(楕円形)	()	30	26	27 楕円形	46×27	16
13	欠番			28	円形	径 29	20
14	(円形)	様	29	29	楕円形	45×32	10
15	円形						

ロームマウンド一覧表

番号	平面形	規 模 (cm)		形態		推定の倒れた方向・風向		
		長軸	短軸	深さ	①	②	倒れた方向	風向
1	楕円形	249	229	59	○		北西側	南東
2	不整楕円形	338	270	57	○		西側	東
3	(楕円形)	(270	164)	(92)		○	北側	南
4	楕円形	236	196	68		○	西側	東
5	楕円形	308	231	78	○		北側	南
6	不整円形	293	220	49		○	西側	東
7	楕円形	322	212	72	○		西側	東
8	楕円形	548	417		○		西側	東
9	円形	径	289	74	○		北側	南
10	(不整楕円形)	256	223	76	○		北側	南
11	不整円形	452	411	68	○		西側	東

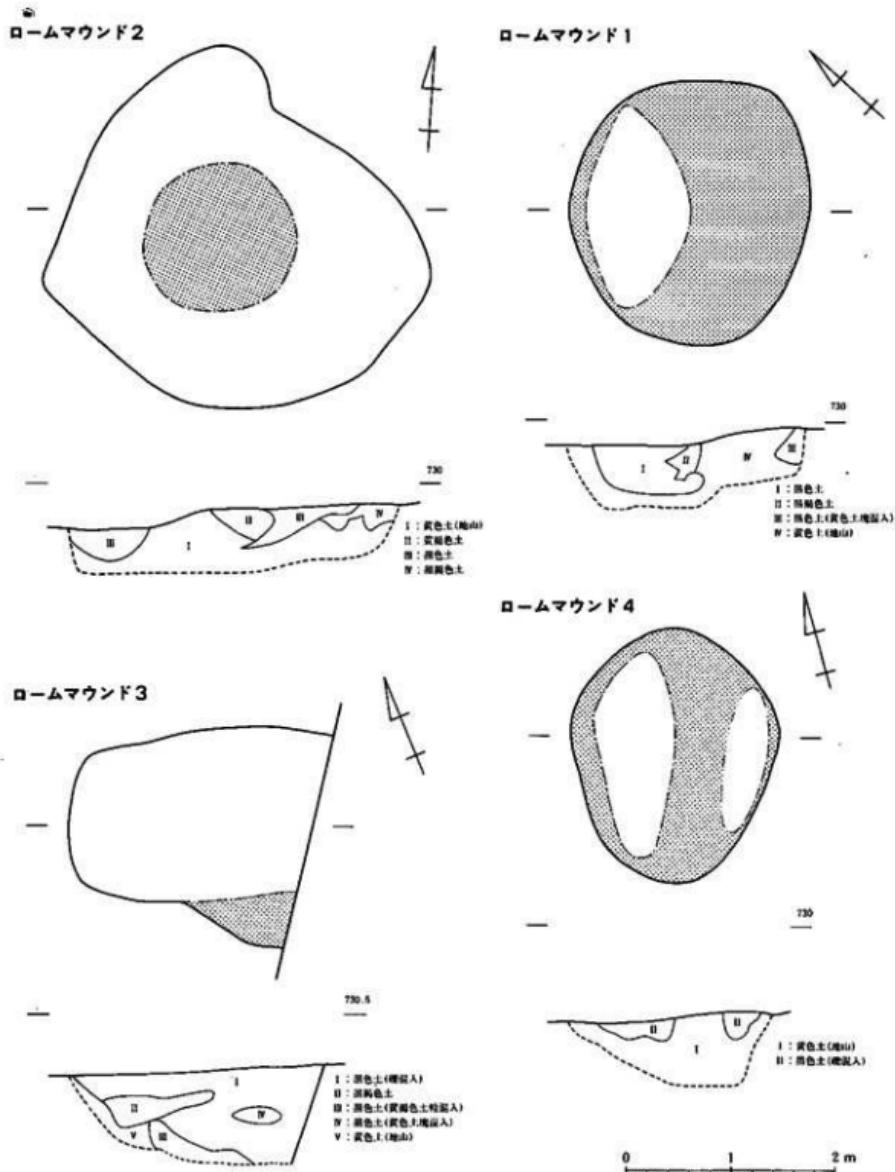


第8図 出土遺物

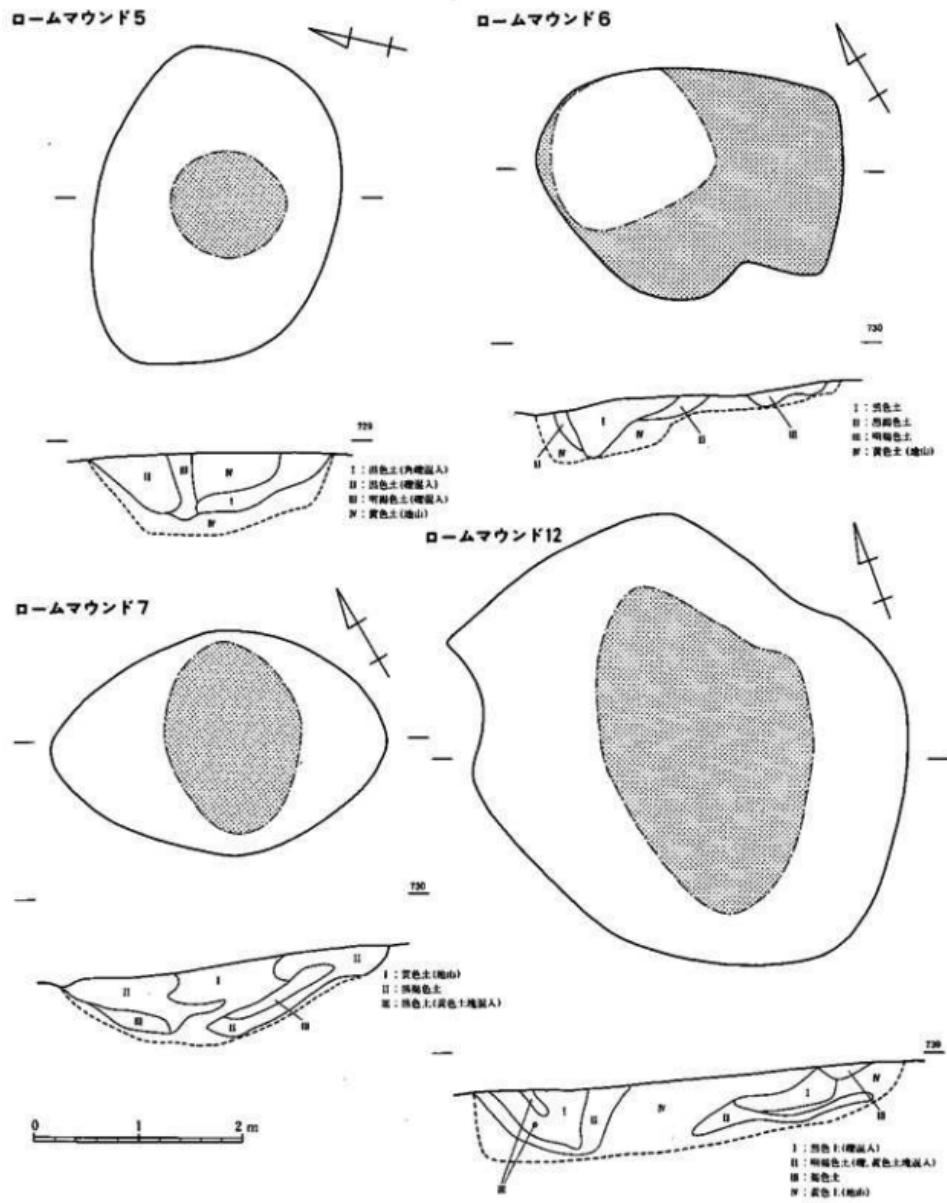
3. 遺物（第8図）

今回の調査で得られた遺物は大変少なく、図示し得たものは6点を数えるのみである。内訳は土器・陶器・青銅製品が挙げられる。

1は内耳土器の耳部破片である。内外ロクロ成形を施し、口縁部は外反する。端部は水平に面取りを行う。耳は端部直下に取り付けられ、ナデ仕上げを行う。断面は丸く作られている。胎土は微砂を多く含み、暗茶褐色に焼かれる。2は御深井輪の盤盤で、松本城二の丸御殿跡に類例を求める。底部・体部とも器厚は均一で、端部は水平な面をなす。施釉は内面および側面に行われる。側面に鉄輪の斑点が見られるが、偶然付着したものかと思われる。胎土は灰白色を呈し、焼成堅緻である。3は鍋ないし土瓶の底部破片で、立ち上がりは強く聞く。底部～外面は回転ヘラケズリが入念に行われ、ススが厚く付着する。内面はロクロナデを行い、施釉される。胎土は茶褐色を呈し、微砂を含んでいる。4・5は古錢で、前者は寛永通宝、後者は開元通宝である。共に鋳型の状態は良好で、文字は明確に読み取れる。6は煙管の吸口で、肩から吸口末端までは滑らかに移行する。末端は玉状にふくらむが、これは細く終わる吸口本体に繋付けによりかぶせをおこなう。肩部内径1cm、全長5.8cmを測り、保存状態は悪く脆弱である。

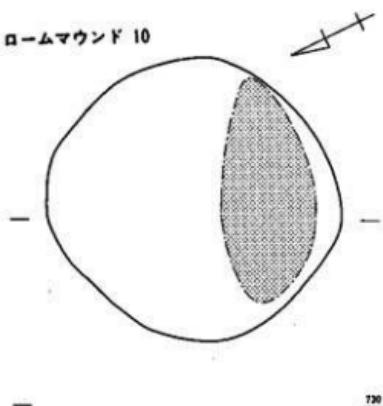


第9図 ロームマウンド (1)

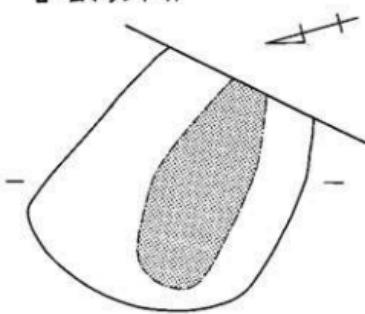


第10図 ロームマウンド (2)

ロームマウンド 10

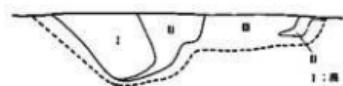


ロームマウンド 11

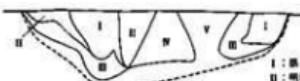


730

730



- I : 黒色土 (小礫混入)
II : 明褐色土 (小礫・青色鉱物混入)
III : 黑色土 (塊・山).



- I : 黒色土 (微少金屬混入)
II : 明褐色土 (塊混入)
III : 明褐色土 (塊・黒色土塊多量混入)
IV : 黒色土 (塊・明褐色土塊混入)
V : 黒色土 (塊・山).

0 1 2 m

第11図 ロームマウンド(3)

4. ロームマウンド

ロームマウンドは縄文時代などのローム層に遺構検出面のある遺跡を調査すると、プランの確定が困難で不整形な円形または楕円形を呈する、性格不明なものを時々見ることがある。風などで木が倒れた痕跡であろうといわれている。今回の調査でも合計11基が確認された。形状は楕円形を基本とした不整形を呈する。断面で観察してみると黄色土は地山が上っていて、黒色土は深く複雑に入り込んでいる部分と浅く入っている部分がある。平面での形態を分けてみると大きく2つに分けることができる。①黄色土の外側に黒色土があるもの。②黄色土の内側に黒色土があるもの。である。平面と断面の観察を合せてみると、平面で黒色土が多い部分は断面では黒色土が深く入り込んでいる部分にあたる。ロームマウンドを風倒木の痕跡とするならばこの部分は木が倒れる時に上の黒色土をまきこんだもので同時に黄色土の部分は地山が持ち上げられたものと思われる。このことから木が倒れた方向、この時の風向きなどが推定できる。

前記に基づいてそれぞれの倒れた方向、風向きを推定する。北側へ木が倒れたものはR₃、R₅、R₉、R₁₀の4基で、西側へ倒れたものがR₂、R₄、R₆、R₇、R₈、R₁₁の6基である。R₁は北西側へ倒れたものと推定する。従って木が倒れた時の風向は東から西へと南から北へで全体としては南東から北西の風向ができる。

ただし風向きは周辺の環境によっても部分的に変化する。このためあくまでも推測の域を出ない。これらのことことが当時の環境復元にどのように必要かはわからないが、小さいデータの積重ねが必要であろうと思われる。

IV 結 び

当遺跡は以前から縄文時代の遺跡として知られており、今回の調査も試掘調査時に出土した縄文土器が切っ掛けとなった。しかし結果は前述のように陶磁器、古銭など中近世の遺物を出土する土壙、竪穴状遺構、ピット等が確認されたのみで縄文土器の出土はみられなかった。これらの遺構は出土遺物も少なく、性格を決定するにいたらない。調査地区は当遺跡の南端を示し、中心は北及び北西側で現集落上へ分布しているものと思われる。

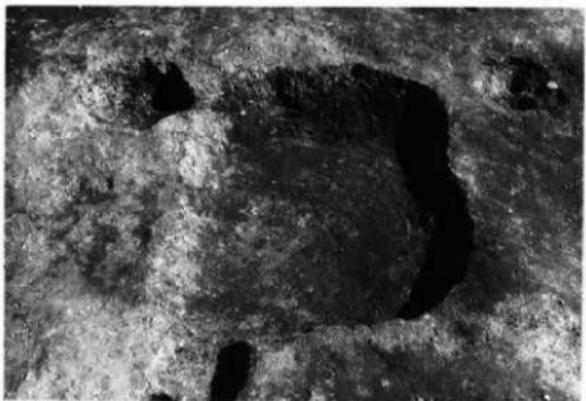
調査にあたってご協力、ご便宜を図っていただいた両内田土地改良区、内田出張所、内田公民館及び地元の方々に対して衷心より感謝いたします。



版



竖穴状遺構 1



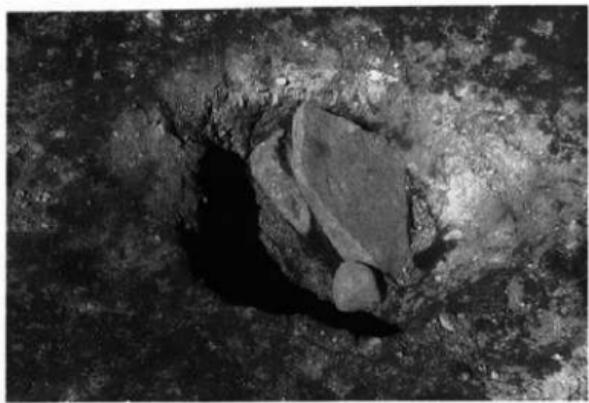
竖穴状遺構 2



竖穴状遺構 2
遺物出土狀態



土壤1



土壤19



土壤22



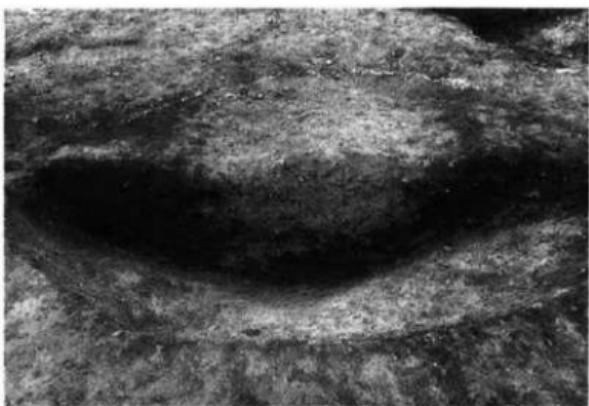
ロームマウンド 1



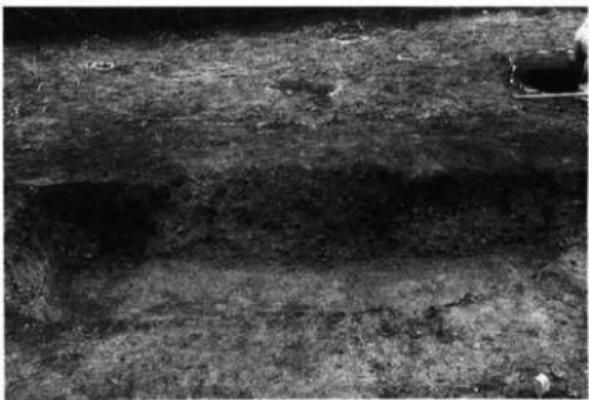
ロームマウンド 4



ロームマウンド 6



ロームマウンド7



ロームマウンド8



ロームマウンド11



調査地区全景 南側より



調査地区全景



松本市文化財調査報告No.64

松本市宮の下遺跡

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会
印刷 株式会社総合印刷
